

「禅宗の美」展によせて

再会する双幅の虎関師鍊墨蹟

一大和文華館蔵「墨蹟 法語」の修理完成とその公開にあたって一

当館が所蔵する重要文化財 虎関師鍊筆「墨蹟 法語」(図1)は、令和4～5年の2ヵ年度にわたり、国庫補助事業として保存修理を実施しました(*)。特別企画展「禅宗の美」展は、同作品の修理完成後、はじめてのお披露目の機会となります。

本作品は紙本墨書の掛幅装で、104.2cm×34.1cmの本紙に、「心外無法々外無心 々身一如 故云禅 是以我門名心之行相 日坐禅也 非四禅八定起坐出入之謂矣 / 示中洞禅人 虎関書」と草書で墨書され、画面中央のやや下方に「虎関」の外方内円印が捺されます。

「法語」とは師僧が弟子に教える要諦を書き与えたもので、本作品は鎌倉時代～南北朝時代の禅僧である虎関師鍊(1278～1346)が、自身の詩文集『济北集』第十二「清言」からの一文を、中洞禅人なる人物に与えたものとわかります。残念ながら中洞禅人がいかなる人物かは明らかではありません。

虎関師鍊は、8歳で三聖寺の東山湛

照(東福寺第二世)に入門して比叡山にて登壇受戒し、南禅寺・円覚寺・建仁寺・建長寺で学んだのち、東福寺第十五世となりました。仏教史書「元亨釈書」をはじめ、日本初の韻書「聚分韻略」、詩文集「济北集」など多数の著作をのこし、漢籍や書にも長けた当代を代表する学僧として知られています。

本作品は、本紙全体に多数の横折れや皺、虫損による欠失、汚れや擦れなどが著しくみられたほか、旧修理の裏打ちの糊の浮きや、折れ伏せ(皺を抑えるための細長い補修紙)による表面の凹凸などにより、作品の美観を大きく損ねていました。このたびの修理では表装を一度すべて解体し、本紙のクリーニングを行ったのち、皺を伸ばして裏から補強を行いました。また後世の補修部分は除去し、本紙になじむ色に染めた新しい補修紙を補填、より違和感のないよう補修紙を補彩して調整を行っています。裏打ちに際しても、作品の色味に大きな影響が出ないように、新しい裏打ち紙の染め色を慎重に検討を重ねて決定しました。これによりこれまでの作品の印象を変えることなく、その流麗な筆運びをより明瞭に鑑賞することができるようになりました。

さて本作品は、実はもも双幅の左幅にあたるもので、この右幅となる作品

が、現在公益財団法人諸戸財団に所蔵されています(図2)。諸戸財団本には、「坐禅者何 坐者心之見像容者也 禅者心之見思想者也 雖見思想無動乱 故云禅也 雖見像容無起臥 故云坐也 如此則」が四行で書され、本紙中央のやや下方に「虎関」の外方内円印(図3)、中央上部には「大應寺」の朱印(図4)が捺されています。この「大應寺」の朱印は所蔵印とみられ、同本がもと大應寺に伝来したことを示すものですが、これがどの寺院なのかなど詳しいことはわかっていません。ただ大和文華館本には、この所蔵印が捺されていないので、早くからこの二幅は別々の場所に伝来したことがうかがえます。大和文華館本と諸戸財団本がもと一対であることは、かつて「大和文華」(第46号、1967年)誌上で画像とともに紹介されて知られていましたが、このたび諸戸財団本の本展への出陳が実現し、初めて両幅が並んで公開されることとなりました。おそらく両幅が離れ離れになって以来、初めての再会となります。

両幅を並べると、「坐禅とは何ぞや。坐は心の像容を見る者也。禅は心の思想を見る者也。思想をみると雖も動乱無し。故に禅と云ふ也。像容を見ると雖も起臥無し。故に坐と云ふ也。此の如くんば則ち、心の外に法は無く、法の外に心無し。心身一如、故に坐禅と云ふ。是

を以て吾が門、心の形相を名づけて、坐禅と曰ふ也。四禅八定起坐出入の謂には非ず。」という「济北集」所収の一連の文章となります。一見自由に書かれているように見えますが、画幅の中央付近で「心」が横に並ぶ様や、右幅の「乱」と左幅の「定」を大きく払いあげる筆致、左下の「如此」と「虎」にみる大きな払いから渦を描くような字形など、両幅が互いに呼応し合う表現を見ることが出来ます。双幅が一つの造形として綿密に構成されていることがわかり、虎関師鍊の高度な芸術性をうかがうことができるでしょう。

さらに本展では、正木美術館より「虎関師鍊墨蹟 聯芳偈」(図5)を出陳いただくこととなりました。本作品は唐子人物や草花が摺り出された舶載の蠟箋を料紙として用い、「聯芳不竭終而始 二十四番風鏡簷」の七言の偈を二行に書し、その行間に「虎関書」の墨書と、先の大和文華館・諸戸家本と同じ「虎関」の外方内円印を捺します。ここに書かれるのは虎関師鍊の著作「十禅支録」偈賛所収の「花屋」の偈頌の後半で、前半の「自一枝親鸞嶺拈 作成門戸脊梁尖」を書いた墨蹟が三井記念美術館に所蔵されており、本作もとは二幅が対となった作品であることが知られています。大和文華館・諸戸財団本のびやかで自由奔放な草書に対して、本書の書風は行書の鋭い機鋒の妙が表現されています。

本展を通して、久しぶりに再会を果たす虎関師鍊の「墨蹟 法語」とともに、書風の異なる正木美術館本とあわせて、虎関師鍊の個性豊かな書を是非お楽しみいただきたいと思います。

(一本崇之)

*[修理期間] 令和4年9月8日～令和5年8月25日、[施工] 株式会社 文化財保存

※図2は諸戸財団、図5は正木美術館より提供。図3・4は筆者撮影

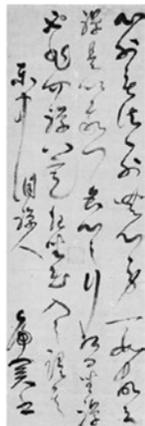


図1

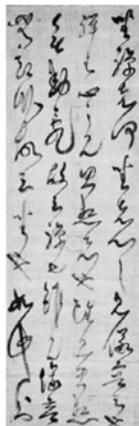


図2



図3



図4

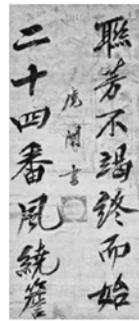


図5